

第50回 令和7年6月25日(水)

アメリカとイランの軍事衝突がエスカレートしています。いまは全面戦争にならないようにコントロールされているように見えますが、偶然の事故で全面戦争に突入してしまう例は歴史上たくさんあります。

6月23日は沖縄戦の組織的な戦闘が終了した日とされています。しかし洞窟に隠れた住民の局地的戦闘は継続し、最後の抵抗が終わったのは終戦後の9月7日と言われています。

観光地化している南部戦跡と違い、読谷村のチビチリガマは道端にある洞窟です。遺骨を踏んでほしくないという遺族の意向で中に入ることはできません。

緑の森の中にあるガマは、誰にも見つからないように息をひそめた住民の思いが残っているような気がします。私は一人でその入り口に立った時、胸が締め付けられるような気持ちがしました。もしかしたらこんなふうに米兵が近くに来た時に、中では「あっちに行け」と必死に祈っていたのかもしれません。戦争は二度と起こしてはならないと思います。

アメリカに行ったとき、パールハーバーの記念館も訪れました。いまだに海に沈む戦艦アリゾナから油が浮かぶ光景は衝撃的でした。それでも記念館は戦勝国のものだと感じました。日本機を撃墜した数を縫い込んだフラッグや当時の武器の陳列は戦争の過ちを悔いているものではなく、先人が勇敢に戦ったことを称えるものという印象がありました。

先日パプア＝ニューギニアに行った時に、国立の博物館を見ました。それほど整備されていないのですが、貴重な資料がたくさんありました。この国は日本軍と連合国軍のオーストラリアの戦場となった国です。

この国の住人は宗主国オーストラリアに従属していたようですが、日本に悪意を持っていたわけでもなく、日本兵もよく助けられたそうです。展示には連合国軍の軍服や武器もありますが、同じように日本軍のものも展示されており、敵と味方を分けているような印象はありません。

近くのブーゲンビルの森に墜落した山本五十六という有名な日本の海軍司令官の撃墜機の扉が飾られていたのには驚きました。

戦争に対する思いは国によって様々です。私たちは世界唯一の被爆国国民です。だからこそ戦争に対するメッセージには独自の説得力があるはずです。

子どもを犠牲にしてしまう戦争はいかなることがあっても起こしてはいけません。日本人だけがわかる歴史があります。